

株式会社大王製作所

「つなぐをつくる」会社に
新しい多くのつながりが生まれた

ノベルティーや携帯ファッショングッズなどの総合メーカーとしてさまざまな楽しいアイデアのある商品を開発している。「モノ」づくりから「コト」づくりへ…人と人とのつながりをつくる企業をめざして、「みんなが幸せになろう!」のミッションのもとに、短納期・多品種少量生産の体制で、多くのオーダーに応えている。その合言葉は、「つなぐをつくる大王製作所」。

主な権利

1997年:実用新案登録 第3041394号
2003年:意匠登録 第1196538号
2009年:実用新案登録 第3156102号
2013年:商標登録 第5621313号

会社概要

所在地:東京都台東区日本堤 2-11-6
電話:03-3876-1341
URL: http://www.daiomfg.co.jp
業種: パーツ・販促品などの企画・開発・製造・販売
設立: 1961年(昭和36年)
資本金: 1億2,000万円



代表取締役社長: 田代 肇さん(左)
東京営業所 開発部 課長: 鈴木 雅晴さん(右)

知財の専門的な判断は
お客様に示す道筋にもなる

株式会社大王製作所が、初めて知財センターを活用したのは、2009年のこと。「メモリーカプセル」という商品を実用新案として申請する相談のために訪れた。これは、いわゆる迷子札…ペットなどが迷子になってしまってもカプセルに飼い主の情報が入っているという、安心のグッズ。同社はこれに、お気に入りの写真や画像を入れられるものを考案した。東京営業所の開発部・課長の鈴木氏は、「この業界では、おもしろいものはすぐに模倣される場合も多いので、このケースでは実用新案というカタチでの登録を考えました。専門的な判断ができると、お客様にも自信を持って道筋を示してあげることができまます」と語る。

特許の侵害がないことを
確認し自信を持って伝えた

その後、2011年3月、東日本大震災に

見舞われたおよそ1週間後に、不測の事態が生じた。同社の「ハンドバッグハンガー」が特許を侵害しているのではないかと、アメリカから日本の代理店を通じて警告状が届いたのだ。すぐに知財センターのアドバイザーとともに文章の読み合わせを行い、アドバイザーの助言のもと、正しい情報を伝達した。「本当にあの時は、知財センターの素早い対応に助けられました。当社のお取引先様にも警告状が送られていましたから、信頼と安心を得るためにも早急かつ的確な対応が必要だったのです。初動が何よりも大切ですからね」と、田代社長は当時のことを振り返った。

守るべきものを守って
商品の価値を高めていく

田代社長は知財センターについて、こう語る。「私たち中小企業は、公社や知財センターの存在を知らなければ、なかなか専門家に相談できません。民間の専門家では、取っ掛かりの相談だけでも費用

が発生してしまう場合が多々ありますから、なかなか気軽にという訳にはいかないのです。それで、苦勞して知的財産を守ってもコストばかりがかさみ、それを真似された時にさらに対策費をかけるわけにはいかないので、もう『真似されるものを作ろう』と開き直って対策を講じなかつた時期もありました。でも、ここに来てやはり、守るべきものは守ろう、知的財産権の取得によって商品価値を高めていこうという会社の方向にしました」

公社の研修プログラムによって
人材がぐんぐん育っている

大王製作所は、知財以外にも、公社の研修プログラムを活用し、人材育成に取り組んでいる。田代社長は語る。「当社は、私の父親がずっと社長としてトップダウンでやってきた会社です。私が二代目として2008年に社長を継いでからは、なんとかボトムアップで市場に合った取り組みをして行かなければと感じていました。ところが、いきなり『自分たちで



ノベルティーや携帯ファッショングッズなど、実にさまざまなアイデア商品が生み出されている。



「めが出るだるま」は、めでたい合格祈願の人気商品。



実用新案の出願のために知財センターを活用した「メモリーカプセル」。

考えよう』と言っても、なかなかできなかったのです。そこで、公社の人にこちらに来てもらって、当社の現状や、私の想いや悩み、社員の声も聞いてもらいながら、どういった社員教育をしていけばよいか、3ヵ年くらいの計画を立てました。これが現在も続いているんです。その都度ふさわしい講師をセッティングしてもらおうなど、一緒に当社のことを考えてもらっています」

こうした人材教育が効果を上げ、社員の姿勢はずいぶん変わってきたという。どうしたら数字が伸ばせるかを自発的に考えるなど、一人ひとりに今まで以上に積極性や責任感が芽生えてきた。当初は、こんな研修はイヤだと不平不満を言う社員も多かったが、今では自ら手を挙げて参加したいという社員が増えて、昨年は「新価値創造の方法論」という研修のテーマに全社員が6日間参加し、たいへん好評だったという。

産学連携プロジェクトで
会社の新たな資産が生まれた

2012年には、公社の「産学連携デザイン開発プロジェクト」に参加し、首都大学東京とのコラボレーションを行った。この経験も同社にとってたいへん大きな財産になったという。田代社長は、こう語る。「創業してからずっと手広く仕事を重ねてくるうちに、お客さんから『大王製作所って、何屋さんなの?』と言われるようになりました。そこで、私たちはどういった会社なのか?ということを、学生さんたちと一緒に整理してみたんですね。そこで『つなぐをつくる』という言葉を生産さんから提案してもらいましたし、新しい立体的な会社のロゴマークも作ってもらったんです」

知財
センター
から

意見を求めるという姿勢はメリットが大きい

特許、商標、実用新案など、多岐に渡って相談を受けアドバイスを行っています。特に、アメリカの会社から特許侵害の警告を受けた件では、お互いに話しながら冷静に対処し、弁護士を通して回答を行って、事なきを得ました。どんな問題でもこちらの意見を求められられることで、メリットも大きいでしょう。 担当: 秋葉原 吉田アドバイザー



長瀬の「エール缶」と、大島の「MAP缶」の試作品。



大王製作所
DAIO MANUFACTURING

「産学連携デザイン開発プロジェクト」で、首都大学東京の学生とともに開発した、「つなぐをつくる」をカタチにした新しい大王製作所のロゴマーク。

地域と人をつなぐ商品が
広げる新しいお土産の世界

この産学連携プロジェクトでは、新たな商品づくりの発想も湧いてきた。「エール缶」は、観光地の情報が入った缶詰で、客が購入すると、その観光地にエール(寄付)が贈られるという、しくみもおもしろいグッズである。その場所へ行った記念のお土産を渡された人は、そこがどのような場所であるかを知り、観光地とつながっていく。現在は試験販売の段階にまでこぎ着けているが、まさに「つなぐをつくる」…人と人をつなぎ、地域と人をつなぐ商品として、新たな可能性を広げよう。 「みんなが幸せになろう!」という同社のミッションは、さまざまなカタチで社会へと羽ばたいていく。